

いま、語りつぐ

平和への願い XIV



宝塚市平和モニュメント「火の鳥」

「平和を願う市民のつどい」
「終戦記念日のつどい」及び
「平和特別講演会」の記録



平和特別講演会“平和の作文朗読”と“平和のスピーチ”的様子

いま、語りつぐ 平和への願い XIV

平成31年（2019年）3月発行

編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課

宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141(代表)

宝 塚 市

発行にあたって

我が国は戦後74年目を迎えました。幸いにも我が国には戦争がなく平和な社会が続いています。しかし、地球上では依然として人類同士の悲しむべき争いが絶えず、地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器も蓄積されてきました。

私は、尊厳ある命を無差別に大量に奪い、傷つける戦争は最大の人権侵害だと思っています。一瞬にして耐えがたい苦しみを与える原爆は、再び使われることのないよう力を尽くしていくなければならないと考えています。

宝塚市は、平成元年（1989年）3月7日に「非核平和都市宣言」を行い、平成15年（2003年）9月19日には「宝塚市核兵器廃絶平和推進基本条例」を施行し、これらの理念、規定に基づき、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民とともに毎年様々な平和事業を行っています。

平成29年度（2017年度）の平和の催しの中から、広島原爆の語り部の近藤紘子さんの「平和を願う市民のつどい」での講演、「終戦記念日のつどい」にて朗読していただきました山本武志さん、南部愛斗さん、宮崎想来さんの作文、「平和特別講演会」での映画監督の石田優子さんの講演と高校生平和大使の森田花菜さんの平和のスピーチを本冊子にまとめました。

平和を願う市民のつどいでは、近藤紘子さんに、ご自身の辛い体験を通し「憎むべきは戦争をする人たちではなく、戦争そのものである」ことをお話ししていただきました。

平和特別講演会では、石田優子さんがこれまで出会った被爆樹や出会った方々の想いを次世代に伝えていく取り組みについてお話ししていただきました。

本冊子作成に当たり、近藤紘子さん、山本武志さん、南部愛斗さん、宮崎想来さん、森田花菜さん、石田優子さんのご協力に心から感謝申し上げます。

平成30年の4月に韓国と北朝鮮の両首脳が「完全なる非核化」を宣言し、6月には史上初めての米朝首脳会議が実現しました。今後、どのように世界の情勢が変わるのが予想もつきませんが、安全で穏やかな暮らしを守り続けることは、市民すべての願いです。恒久平和の実現のためには、戦争の悲惨さを語り継いでいくことはもちろん、次世代を担う子どもたちに、命の尊さ、平和の大切さを身近な問題として認識してもらえるよう今まで以上に努めていきたいと思います。

この平和冊子を一人でも多くの市民の皆様にお読みいただき、戦争と平和、命の尊さについて考える一助になることを願ってやみません。

平成31年（2019年）3月

宝塚市長

中川智子

目 次

1 平成29年度「平和を願う市民のつどい」記録	1
第1部 ミニコンサート	1
第2部 講演会	3
2 平成29年度「終戦記念日のつどい」記録	19
平和のメッセージ『ぼくたちにできること』	20
平和のメッセージ『ぼくたちにできること』	21
平和のメッセージ『いつも気にかけておくべきこと』	22
3 平成29年度「平和特別講演会」記録	25
第1部 作文朗読	25
平和のスピーチ	26
第2部 講演会	28
4 非核平和都市宣言文	46



平和を願う市民のつどい

とき 平成29年（2017年）7月27日（木）午後2時開演

ところ 宝塚市文化施設 ソリオホール

第1部 ミニコンサート

1 出演

風と雲（百瀬秀男さん、小林直一さん）



2 プロフィール

百瀬秀男

1949年松本市生まれ。宝塚市在住。靴の輸入卸売の会社を経て41歳の時に靴の企画輸入卸売業の会社を立ち上げる。57歳の時、良きパートナーであつた妻が他界し大きな喪失感を味わう。一年半ほどした頃、長いトンネルから抜け出すきっかけになるかもとふと目にとまった「ギター教室」に通い、多くの仲間と音楽を通して元気になることが出来、今度は少しでも人の助けになればと考えて老人ホーム慰問等の演奏活動をしている。

小林直一

1952年八尾市生まれ。八尾市在住。中学生の時、高石ともや、ピート・シーガー、ボブ・ディラン、岡林信康、加川良を知り、社会の矛盾と反戦に目覚め、自分にも出来るとギターを弾き歌いだす。社会に出てからはギターを弾いていなかったが、55歳の時「ギター教室」に通いだし、人と演奏する楽しさを体感する。同時に教室に入りギターを始めた百瀬氏と知り合い以降、一緒に老人ホーム慰問等の演奏活動をしている。

曲目 喫茶店の片隅で (作詞：矢野亮、作曲：中野忠晴)
 黄昏のビギン (作詞：永六輔、作曲：中村八大)
 見上げてごらん夜の星を (作詞：永六輔、作曲：いずみたく)
 故郷 (作詞：高野辰之、作曲：岡野貞一)



コンサートの様子

第2部 講演会

1 講師
 近藤 紘子さん (広島原爆の語り部)

2 講演テーマ
 ヒロシマ、72年の記憶～人から人へ～

3 講師プロフィール
 近藤 紘子



1944年生まれ。生後8箇月の時、爆心地から1.1kmの牧師館で被爆し、家の下敷きになりましたが、奇跡的に助かりました。

父親である谷本清さんは、戦後の広島で平和のために尽力した牧師として、アメリカの作家ジョン・ハーシーが執筆し、世界でベストセラーになったルポルタージュ「ヒロシマ」に登場する人物です。その本がきっかけとなり、広島の原爆について取り上げたアメリカのTV番組に父親と近藤さんが出演した際、B29エノラ・ゲイの副操縦士と対面しました。

その後、1966年センテナリー短期大学、1969年アメリカン大学を卒業し、父親の平和への思いを引き継ぎ、海外での講演を含む様々な活動を行っています。

日本キリスト教団 三木志染教会 牧師 近藤泰男の妻、「国際養子縁組」世話役、「財团法人チルドレン・アズ・ザ・ピースメーカーズ」国際関係相談役、著書・テレビ・ラジオ出演多数

4 講演の記録 「ヒロシマ、72年の記憶～人から人へ～」

近藤 紘子（こんどう こうこ）と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

先ほどのご紹介にありましたように、私は1944年に広島で生まれました。1945年8月6日、8箇月の赤ん坊でした。ですから実は何も当時の事は覚えておりません。覚えていない私が、なぜ話ができるか。初め、今から45年前、話をしてほしいと言われた時は、「いや、私はあの日のことは何も覚えていないので、お話するようなことはありません」とよくお断りしておりました。しかし、やはりあの地にいた者として、いろいろと体験をし

たこと、それをお話させていただければと思い、今では世界を回っております。



被爆後の広島流川教会

ここにあります写真、私の父、谷本清が牧師をしておりました教会です。爆心地から 800 メートル、一瞬にしてすべてこのように、もちろん塔の十字架もなくなり、窓ガラスは全部壊れ、残ったのはこの建物の外壁だけでした。広島の町はデルタ地帯です。川が当時は 7 本流れしておりました。赤い所が全て焼けた所でございます。私が生き残った、そのことについて、私は親に直接どのようにして生き残ったのかを聞くことはしませんでした。なぜならば、子どもでもそれを私が父や母に聞けば、あの一番大変な日のことを思い出させなければいけない。それは、やはり娘としてできない。しかし、父がいろんな所で講演しているのを聴き、また、彼が書いた本などを読み、だんだん分かってきました。

「ヒロシマ」という名前は、アメリカでは知らない人はいないみたいですね。最初に「ヒロシマ」という言葉が出たのは、ジョン・ハーシーという方が広島に来られました。そして、1946 年、本を書かれるのですけど、最初は町がどのように破壊されたか、それを書くつもりでいらっしゃいました。ドイツ人のカトリックのクラインゾルグ神父に付き添われて父を訪ねに来られました。その日、父は外に出ておりましたものですから、ジョン・ハーシーは名刺を母に託し、「また明日会いに来ます」ということで帰られました。帰ってきた父はその名刺を見て、『ライフ・マガジン』と『ニューヨーカー』という言葉が書いてあった、その二つの特派員として来られたわけです。父は、実は次の日ももう予定が入っていた。それで父はある行動をとりました。「会いたい、会って広島の惨状を話したい、しかし次の日は用がある」ということで、その日急いで自分がどのように生き残ったのかを書き残しました。そのことは、私は小さい時から知っていましたので、いつの日かその手紙を、父がジョン・ハーシー宛てた手紙をいつか見てみたいなあと思っておりました。ちょうど 2 年前、ジョン・ハーシーのお孫さんが日本に来られました。ジョン・ハーシーは本を書いたけれども、子どもたち、孫たちには、一切、広島のことは語らなかったので、お孫さんは自分の目で広島が見たいということで来られました。その時、彼からプレゼン

トをもらいました。きっと、皆さんもプレゼントをもらうと喜ばれると思いますけど、私もプレゼントを嬉しく受け取りました。オレンジ色のファイル、そこから出て来たものは、父の筆跡で書かれた手紙のコピー、英語で 9 ページにわたって細かく書いてありました。これは今、アメリカのイエール大学で保管されています。この中で最初のページには父は謝っているわけです。とにかく思いをすべて書いた。しかし、書き間違えたり、スペルを間違ったり、本来ならばちゃんと書き直さなければいけないのだが、私にはもう時間がない。ということで、9 ページにわたって書いたこの手紙、広島の様子を彼なりに、一生懸命地図も夜中に書いたわけです。次の日、ジョン・ハーシーは父に会いに来られました。母からこの手紙を受け取ったハーシーはすぐそれを読んだ。人々があの日あの焼け野原でどんな状態だったかということが分かり、人道的な立場から人々がどのようにあの大変な中を生き残ったのか、それを書こうと思い、彼はペンをとったわけです。

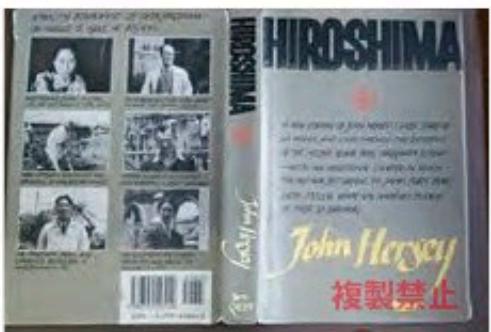


これがその本です。この本には、女性の方二人、お医者様二人、宗教家二人、一人はドイツ人のカトリックの神父さん、もう一人は私の父です。六人の方がこの本に登場します。実は、最初から本にはなりませんでした。最初は『ニューヨーカー』という雑誌に載りました。二回三回くらいに分けて雑誌に載せる予定でしたが、あまりにひどい惨状を、もし

も多くのアメリカ人がこれを読めば、「えっ、そんなものを使ったのか」と非難を浴びるのではないかと心配するだろう。政府の人たちがきっと、最初は致し方ないと出たとしても、あの連載を止めさせるかも分からぬ。それを心配した社長、編集長、作家のジョン・ハーシー、三人だけで決められたんですけど、何を決めたかというと、ほかの記事をちょっと次の号に回して、この一冊の本だけを一つの雑誌に載せました。1946 年の夏のことです。発売と同時に 30 万冊売れたそうです。例えば、アインシュタインは、本と雑誌合わせて千冊購入し、それを自分の友人や科学者に、これは是非読んでほしいと配られたそうです。

ジョン・ハーシーは「ヒロシマ」が出版された 40 年後、また広島を訪れ、今度は『その後』という第五章を書かれました。分厚くなつて一冊の本になっております。この『アフターマス (aftermath) (その後)』には私のことも書いてあるんですけど、ちょっと事実と異なることがあります。まあ私はこの本の中で重要な人物ではないので、そのことに対しては何も申し上げませんでした。しかし、40 年後、広島を訪れたジョン・ハーシーに私はお会いした時、どうしても私としては言いたいことがあります。それは、「アイ・アム・ノット・ア・ボーイ、アイ・アム・ア・ガール (I am not a boy. I am a girl.) 私、男の子ではない。女の子です。」これが言いたかった。だって私にとってはとっても大切なこと。それを言っただけで、ジョン・ハーシーは静かに「絃子、本はもっているか」と声をかけ

くださいました。私はこの本をジョン・ハーシーに渡しました。そしたらすぐ最初のページに、私宛にメモを残してくださった。「この本で唯一間違いがある。心からのお詫びを申し上げます。そして、これから的人生。お幸せに」と温かい言葉が書いてありました。一つ謝りますという所の横に41ページと書いてある。私にとって大切なことなので、ご本人を前にすぐに41ページを開けました。嬉しかったです。「インファンント・サンinfant son(幼い息子)」のson(息子)をペンで塗りつぶし、ページの下の所に矢印で「daughter(娘)」に変えられました。40年間、私はこの本の中では、ずっと男の子でしたけど、やっと、40年後女の子になりました。この本は、アメリカではとても有名な本となりました。1999年、ニューヨーク大学が中心になり、二十世紀を代表する報道または本などが挙げられ、二十世紀のジャーナリズムを代表する報道は何かということで、多くの方たちがそのアンケートに答えました。そして、挙がってきたのは、100冊の本の名前でした。第一位にあがったのは、このジョン・ハーシーの『ヒロシマ』でした。アメリカでは、1960年代、1970年代初めのころでも、まだ、この本が学校の副読本として読まれておりました。今、この本に登場した6人、皆さんお亡くなりになり、まあ、付録だった私みたいな者が皆さんの記憶には新しく残っているわけです。



この本が出たことによって、アメリカの多くの人たちから広島に手を差し伸べてくださいました。私の父は日本で生まれ育ち、大学は関西学院の神学部に行きました。牧師となり、その後、奨学金を手にし、アメリカのエモリー大学の神学部に行って、修士をとったわけです。その友人たちが、この本を見て、自分たちが共に学んだ友人があの広島にいたということを知り、多くの人たちから助けの手があがりました。私の父はその友人たちの助けによって、いろいろな活動をいたしました。一つは「精神養子縁組」。戦後すぐに、子どもが養子縁組で海外に行くということはできませんでしたので、雑誌を通して、多くの広島の孤児となった一人一人の子どもに、アメリカの心ある人々が精神的にサポートするという意味で「精神養子縁組」という運動が始まりました。アメリカから送られてくる一つ一つの手紙、自分の子どもに書くような温かい手紙でした。「寒くなるけど、風邪をひかないようにね」、「しっかり勉強してね」、「もうすぐ誕生日だね」、「おめでとう、クリスマスがやってくるね」、「サンタさんがプレゼント持ってくれれば良いね」。一つ一つ、親もいない、きょうだいもいない、ひとりぼっちになった子どもたちにとって、その手紙は宝物となつたわけです。私には親がいる。しかし、その子どもたちには親がない。私が聞いたのは、たった一つの爆弾が広島の町に落ちた。それによって、この子たちは、全てを失くしたということを知った。よし分かった、私が大人になつたら、この子たちの敵はこの私が討つ。B29、エノラ・ゲイ号という飛行機に乗っていた人たちを見つ

け出して、パンチするか、噛みつくか、蹴飛ばすか、私は「絶対敵を討つ」と心に決めました。でも、私の父の職業は牧師、そんなことを親が知つたら、「ちょっと、あなたいらっしゃい。その考え方間違つてます」と、きっと延々とお説教されるのは、もう目に見えるように分かるので、私は親にだけには知られたくなつた。心の中にしまつておきました。

全て灰となり、壁しか残っていないこの教会、一番右端に立つてるのは父です。聖書からいろいろな言葉を子どもたちに、この若いおねえさんたちに語りかけています。小さい頃、おねえさんたちは「絣子ちゃん、絣子ちゃん」と私のことをすごくかわいがってくれた。中には、櫛をとって、私の髪の毛をといてくれたおねえさんがいた。櫛を持った手を見た、指が全部引っ付いたまま、どうしてこんなことになったんだろうか、子どもの私でも、そんなことを、おねえさんに聞いてはいけないということくらいは分かる。私にとって、そのおねえさんたち、どの声も、どの声も、本当に優しい温かい声。でもね、小さいときは、そのおねえさんたちの顔が見られなかつた。瞼は額に引っ付いたまま、唇は頸に引っ付いたまま、どうして、このおねえさんたちはこんなんだろうか。そして、おねえさんたちが話している言葉を聞いた。どうも広島に、たつた一つ爆弾が落ちたことによって、多くの人が亡くなり、多くの人たちがケロイドを負つた。よし、やっぱり私は大人になつたら、あのB29、エノラ・ゲイ号という飛行機に乗つていた人たちを見つけて、この私が、この私の手で敵を討つ。子どもの私にとって戦争のことはよく分からぬ。私に分かることは「あの飛行機に乗つていた人たちさえ、爆弾を落とさなければこんなことにならなかつたのに」そう思つておりました。おねえさんたちは、一人、二人と教会に来ました。父の友人、同じ牧師をしている人も、急いでアメリカから來た。このおねえさんたちに何ができるのか。日本では「原爆乙女」と呼ばれましたけど、アメリカでは「ヒロシマ・ガールズ(HIROSHIMA GIRLS)、広島の少女」ということで、いろいろな計画が始まりました。私は、小さい時からそういう人たちに囲まれていましたので、アメリカ人が憎いとは思ったことはありません。

例えば、このフロイド・シュモーさんは大学の先生です。木、森林について研究をなさつていた先生です。彼は、このジョン・ハーシーの『HIROSHIMA(ヒロシマ)』を読んで、もう全てが焼け野原になつた状態が分かり、自分の同僚、学生たちに呼びかけて、広島にシュモー・ハウスを建てました。そして後には長崎にも家を建てました。その人たちは実は釘を打つこともない。ノコギリだって、日本のノコギリと西洋のノコギリは違う。ですから、最初から、釘を打つこと、木を切ることから、全部日本人の大工さんに教わつて建てた、1949年のことです。原爆が落ちて4年後、この人たちは広島に来て一生懸命家を建てましたが、泊まる所がない。そりやそうですよね、町全体が焼けていたのですから。教会はまず、その方たちの寝泊まりできる場所を提供し、教会から毎日家を作りに用品という所まで行っておられました。だから私はその人たちと毎日、朝は一緒に食事をし、そして、みんな本当に何か広島のためにできることはないかということで、毎夏3箇月、日

本に来て家を建てたのでした。

次の方は、ノーマン・カズンズさん。この方はその時雑誌社の編集長で、この方も父の「ヒロシマ・ピース・センター」の働きに協力してくださり、彼は「原爆乙女、ヒロシマ・ガールズ」のために活動を始めてくださった方です。

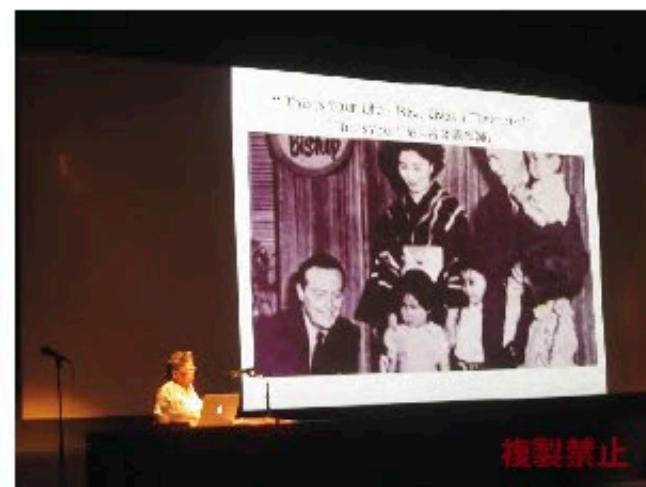
私は小さい時、実は父と散歩がしたかった。父の膝の上にも座りたかった。しかし、父はいつでも外にいました。例えば、アメリカに講演旅行に行くと、1年も2年も帰ってこない。しかし、フロイド・シュモー博士とかノーマン・カズンズさんは、その寂しがつていてる私に気が付き、一生懸命私に温かく声をかけてくださいました。教会はまず屋根を作りました。そうこうしているうちに、原爆が落ちて10年後の1955年のことです。おねえさんたち25人が選ばれました。ニューヨークにあるマウント・サイナイ病院が、おねえさんたちの治療を是非私たちにさせてくださいと。25人はどのようにして選ばれたかというと、もしも、内臓などどこか悪いことがあって手術に耐えられない方は、残念ながら行くことができなかった。そのように病院側が、今できる技術を提供できる可能性のある25人が選ばれてアメリカに参りました。当時、アメリカに行くといつても、まず飛行機代はすごく高い。そこで、ニューヨークにある「ヒロシマ・ピース・センター・アソシエイト」、広島にある「ヒロシマ・ピース・センター」を助ける支部みたいなところです。その支部のみんなが手を尽くし、いろいろと考えてくださいました。発案者の父、そして、25人のおねえさんたち、お医者様三人、通訳、そして看護師、みんなでアメリカに行きました。どうやって行ったかというと、広島の近くに岩国基地がもうできておりましたので、実はみんなはアメリカの軍用機に乗ってアメリカに行きました。のちに私が少し大きくなって、おねえさんたちが「絆子ちゃん。あの日私たちはあの飛行機に乗るのが怖かった。だって軍用機、かつてあの軍用機から爆弾が落とされた。でもね、私たちは生まれた時の身体に戻りました。戻してもらえるなら、戻してもらいたい。手術をして前の顔になりたかった。だから思い切ってあの飛行機に乗ったのよ。」って言ってくれました。

おねえさんたち、父、みんなが岩国基地を発つて
次の日、母のところに国際電話がかかってきました。

当時は家には電話がなく、広島女学院の宣教師のところに、アメリカのN.B.C.、テレビ局から母に電話が入ってきたわけです。「谷本さん、明日の飛行機でアメリカに来るよう。このことは一切誰にも言って

はいけない。特にご主人には絶対に言わないでほしい」ということでした。母はどうしていいか分からず、戦後、日本の大きな街には、「アメリカ文化センター」というのがありました。「アメリカン・カルチャー・センター」。アメリカの事を知りたいと思えば、そこに行けば情報が手に入る。父・母が親しくしていた館長さんのところへ母は一人で行き、事情を説明したら、もう館長さんはそのことをご存知で、「谷本さん、何も心配することはない。この番組はアメリカでもとっても良い人気のある番組だから是非行くように」という

こと。まず、アメリカに行くにはパスポートが要る。パスポートがない。原爆が落ちて10年後でしたから、私10歳、弟7歳、妹4歳、弟2歳、4人の子ども。ただし家にはあまりお金がなかったので、母はまず急いで下の二人を連れて東京に行き、私とすぐ下の弟は、伯母の一人に付き添われて夜行列車に乗って東京に行きました。もちろん受付で母は「パスポート1日で取るなんてとんでもない。無理なことです」と言われましたが、「実はこういう事情で、こういう電話が入った」ということを説明しましたら、どなたかが受付に来てください、「谷本さんお待ちしております。これがあなたの方のパスポートです」。もうパスポートは出来ていた。ということは被爆10年後、まだアメリカの力は強かったということを小さい私でもよくわかりました。飛行機に乗りアメリカに着きました。



忘れもしません、1955年5月11日。この（ソリオホール）くらいの大きさのホールは多くの観客で一杯でした。窓がなく、スポットライトが照らされ、私は舞台の端に立っていました。反対側を見ました。三人の方がいらっしゃる。一人は父の大学院時代の友人、もう一人は長年日本で英語を教えていたミス・スターキー、三人目は私の会ったことない人、写真も見たことがない人。5年生の私は興味津々、母に聞きました。「ねえお母さん。あそこに立っている右側の人、あの人は誰？」母がすぐに答えてくれない。あとで分かったことは、母は母で、「この子に事実を伝えていいものだろうか。理解できるだろうか。しかし、もう小学5年生、世の中の事が少しずつ分かってきていい齡だ」と母は思い、私にこう言いました。「絆子、あそこに立っていらっしゃる方は、彼はキャプテン・ロバート・ルイスといって、広島に原爆を落としたB29、エノラ・ゲイ号という飛行機に乗っていた副操縦士だ」と教えてくれました。びっくりしました。だって、小さい時から、いつの日か、私が大人になったら、あの広島の敵はこの私が討つ。そうずっと思ってた人の一人が目の前にいる。私もバカではない。大きなテレビカメラが舞台を向いている。その真ん中に走って行って、そのおじさんを叩いたり、噛みついたり、パンチしたり、そんなことをしたらいけないことぐらい分かる。じゃあ、私に何ができるか。私はもう目をいっぱいに開いた。睨みつけた。「あなたたちさえ、あの爆弾を落とさなければ多くの人は苦しまない

くてすんだのに」そういう思いで覗みつけていました。この番組のハイライトは、広島の地にいた私の父、原爆後被爆者のために何かできないかと、一生懸命働いた父。もう一人は同じ日、同じ時間、広島の空の上からたった一つの爆弾を落とした。その二人が舞台の上で会う。詳しいことは 5 年生の私には分かりませんでしたけど、父が留学していたということもあり、英語を少し習っていたので少しこそは分かりました。司会者が、キャプテン・ルイスに聞きました。「原爆を落とした後、あなたはどう思いましたか」。彼いわく、8 時 15 分、目標は広島の町の T ブリッジ、空から見ると橋が一つだけアルファベットの「T」の形をしている。だから当時はアメリカ軍の中では、その場所のことを「T ブリッジ」って言っていたそうです。爆弾を落としそこを飛び去る。というのは、落とした者も、もしもかしたら、爆風で乗っていた飛行機も墜落する可能性がある。だから、落としたらすぐそこから飛び去るように。しかし、次の命令は落とした物の威力はどうだったのか見てこないといけない。エノラ・ゲイ号という飛行機は再び広島上空に来ました。キャプテン・ルイスいわく、飛行機の窓から広島を見た。広島が消えていた。そして彼は副操縦士ですから、飛行日誌に何時何分、経度何、ずっと記録を書かなきやいけない。そのノートに、自分のお母さんにメモを書く形で言葉を残しています。その言葉は「My God, What have we done. (神様、私たちは何ということをしたんでしょう)」。私が覗みつけていた彼の目から、大きな涙があふれ出た。それを見た私、ショックでした。ずっとあの人たちを鬼だと思っていた。だから私はいつか大人になったら、敵をやっつけようと思っていた。しかし、その人の目から涙が出た。その涙を見たとき、「この人は鬼ではない。この人も人間だ」ということが分かった。大人が会話している間、私は私で、そっと自分の心の中を覗いた。私にもいっぱい悪いところがある、親のいうことを聞かなかつたり、弟とけんかをしたらいけないと言われていたのに、けんかをしたこともある。私の心の中にも、悪い悪がいっぱいあるということがその時、分かった。その私がどうしてこの人だけを、責めることができるのか。心の中でごめんなさい、あなたのこと何にも知らないで、私ずっとあなたを憎んでいた。私が憎むべき人はあなたではない。私が憎むべきことは戦争、人間の心の中の悪、戦争をおこす心、それを憎まなくてはならないのだ、と分かりました。番組の終わり、私はそっとカニのように横歩きした。どうして私がそういう行動をとったか分からぬけれど、もう、それしか私にはできないと思ったんですね。そして、キャプテン・ルイスの横に立った。顔はお客様がいらっしゃる正面を見、カニのように歩いて、そして手でそっとおじさんの手に触れた。それに気がついたおじさん、キャプテン・ルイスも私の手をギュッと握ってくれた。今では、あの日の事が今の私の原点となっています。この人のことをもう少しお話しさせていただくなれば、私はアメリカの大学おりましたので、大学 2 年の時にキャプテン・ルイスに会いたいと思った。なぜ会いたいか。それは一言、言いたかった。「サンキュー (ありがとう)」が言いたかった。なぜならば、私はもし、あの 5 年生の時、あのキャプテン・ルイスに会わなかったら、いつまでも、いつまでも、私は正しい人、間違っているのは相手だと思い続けたかもしれない。しかし、あの日に会って、

私は変えられた。だから、「ありがとう」が言いたかった。彼に会おうと思い、父の大学院時代の友人たちに探してもらうようにお願いしました。彼は病院に入っている。彼は精神的に病んでいると、いろいろな答えが入ってきました。そしてやっと彼の居場所が分かりました。しかし、私は貧乏学生、アメリカは広い、そこまで行くお金が無かつた。「ああ、彼は彼でずっとあの日から心を病んでいるのだな」っていうことは理解できたが会いに行く事はしませんでした。5 年半の留学生活が終わり、日本に帰国し、ある日新聞を見た。彼が亡くなったと書いてあった。その時、私が思ったことは、あの広島の慰霊碑には、言葉が刻まれている。その慰霊碑にはノートが収められ、一つ一つのノートには、あの広島に落ちた原爆によって亡くなった人たち、原爆症で亡くなった人たちの名前が書きこまれている。その慰霊碑には『安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから』と刻まれている。私はこの言葉がとても好きで、大切な言葉です。広島に行くたびに、あの言葉を、しかも私はこの目で確認し、自分に日々言い聞かせています。キャプテン・ルイス、あなたにも申し上げたい、もう、どうぞ安らかにお眠りください。私たちは二度と、あのような戦争はしません。彼が亡くなって、2、3 年して、彼を担当した精神科医は、彼が病院で作った彫刻を世に披露しました。私はそれを新聞で見ました。小さい彫刻でした。きのこ雲一つ涙一滴、この人の思いがさらにすべて表れているように思います。

その番組「This is your life. Kiyoshi Tanimoto (これがあなたの人生だ。谷本清)」。これは分厚い台本になっていて、出演される人の言葉が全部書かれています。実は父だけが状況をよく分かっていない。みんなリハーサルしています。リハーサルしていないのは私の父だけ。しかし、テレビ局はちゃんと調べ、父が言うだろうという言葉もちゃんとこの台本には書かれています。この番組は長いんですけど、ちょっとだけ、どんな様子だったかお見せしたいと思います。これは 1955 年 5 月 11 日のテレビ番組です。

この番組はアメリカで長年俳優をしていた人、女優をしていた人とか、有名な方たちが出て、その人の人生を描くわけです。父の場合は初めて外国人をとりあげ、原爆ということを、普通の一般的な娯楽番組とまでは言いませんけども、楽しい番組に原爆という深刻なテーマを取り上げたわけです。それはなぜかというと、やはり、十代、二十代でケロイドを負ったおねえさんたち 25 人がアメリカが落とした原爆によって火傷を負った事、アメリカの病院で治療することになったセンセイショナルなニュースだったからでしょうか。この場面を見てください、父は何が起こっているのか全然分かっていません。司会者のラルフ・エドワード氏は父に向かって「キャプテン・ルイスが、あなたと初めて会います。」ああ、これ私ですよ、私もかわいい時代があったという証拠にお見せします。さて、この番組、全てのアメリカの番組ですからコマーシャルが入ります。でも、その中の 1 回はスポンサーがコマーシャルをオミット（除外）してくれる。というのは、あまりにもシリアル的な番組なので、コマーシャルも一つのけてくださいました。そしておねえさんたち 25 人、2 年間、アメリカに滞在し手術を受けたわけです。数人ずつ、一人につき手術は何回もしないといけなかったので、2 年間かかりました。父はアメリカ中を講演して回る。そして募金

を募る。実はこの番組でも募金を募り、ニューヨークだけではなく、日本の阪大病院または東大病院でも、なるべく多くの方たちに手術してもらおうとこの運動を頑張ったわけですよ。この私、もうこの顔見てお分かりでしょうけど、もう睨んでいました、最初は。でも、この出会い、私にとって今は宝物です。



この旅行で、本当はすぐ日本に帰るはずだったんですけども、理事の一人に、パール・バックっていう方がいらっしゃいました。パール・バックってご存知ですか。日本では一番有名なのは、『大地』という本を書かれた方です。彼女はどうしても父が講演している間、アメリカでは5月といえば夏休みに入る。だから、奥さんと子ども4人、私の家でひと夏、過ごすようにということで、私は母と一緒にパール・バック女史の家に3箇月いました。その3箇月、いろんなことを学びました。まず一番大切なことは、「紳子、戦争が始まったら、多くの人が苦しむ、悲しむ、犠牲になる、でも覚えていてほしい、一番の犠牲者は子どもたちだからね」。実はパール・バックは、戦争で親を亡くした子どもたちのことを案じ、そこから養子縁組ということが始まりました。そしてこの中にいる、前に座っているヘンリエッタ、黒人の女の子、私とひとつ違い、この子は私の大のお友達となり、今私が養子縁組に携わっていることは、このパール・バックとの出会いでした。

40年経った1985年、タイムズ誌が特別な雑誌を出しました。それが1985年7月29日号の雑誌です。原爆が落ちて40年後、表紙にキャプテン・ルイスが言った言葉、「My God, What have we done. (神様、私たちは何ということをしたんでしょう)」と大きく書かれ、その下に「キャプテン・ロバート・ルイス、エノラ・ゲイ号の副操縦士、広島、1945年8月6日」と書かれています。これがどんと表紙に出たことによって、再び、彼の言った言葉が世に広がりました。

私はこういう中で、本当に多くの人の出会いがありました。特に、私は「チルドレン・アズ・ザ・ピースメーカーズ」、子ども平和使節団とでもいいましょうか、その財団ともかかわりが始まりました。子どもたちと世界のリーダーたち、政治家の方々、ゴルバチョフ書記長とか、多くの人たちに「僕たち、私たちは核のない世界を望んでいるのです」と。例えば、子どもたちはイラクのフセイン大統領にも会わせてほしい、会って話がしたいと

言い、湾岸戦争が始まる3週間前に、バグダッドに同行しました。一番辛い記憶に残っているのは「ベスラン」という街。ロシアのこの街で、テロリストが小中高の学校を襲った。その学校は、9月1日が入学式と進級式があり、多くの人たちが集まっていた。おじいさんおばあさん、おとうさんおかあさん、みんなその式典に参列していた。そこへテロリストが3日間占拠し、子どもたちとその学校にいた人たち368人亡くなりました。私は、そこに4箇月後に行くことを依頼されたが、ロシア語を喋れません。でも私は「そこで生き残った子どもたちの横に立つ、手を握る、ハグすることはできる」という思いで行きました。この写真は1年後の記念式典です。赤い横断幕は世界中の子どもたちが作った横断幕です。一つ一つ、子どもたちが調べて書いた、戦争で亡くなった子どもたちの名前と歳、だれだれだれべえ、3、と書いてあったら、「あっ、この子は3歳で亡くなったんだ」と一目で分かります。この横断幕をアメリカから持って行きました。この横断幕を全部開こうすると、250人の子どもたちが必要です。横3メートル、縦2メートル、それをつなぎ合わせると、1.6キロメートル。この「ベスラン」で亡くなった子どもたちの名前も横断幕に書き入れました。これは校舎をずっと横断幕で囲ったんですけど、おかあさんたちが、「窓だけは旗でふさがないでほしい。息子や娘が中からいつでも出てこられるように窓だけはふさがないでほしい」。生き残った子どもたち、どの子も結局1年間、学校に戻ることはできませんでした。それだけ心は傷ついていたのです。バグダッドにも行きました。いろんな国の子どもたちと、世界を回る中、多くの子どもたちは世界の平和を願っています。今では、講演を頼まれれば、私はどこでも行きます、なぜならすべての子どもたちが平和に生きていてほしいからです。

2014年にアメリカにあるウェブスター大学は、私に名誉博士号をくださいました。この大学はセントルイスという街にあります。実は、トルーマンが生まれた所。街には、トルーマン・ストリートという大通りもあります。「トルーマンがここにいたんだなあ」ということがすぐ分かるわけです。名誉博士号を頂いた時、大きな額縁をもらいました。それはセントルイス市の宣言書、市長がサインしています。それに2014年5月11日を「transformative learning day (トランスフォーマティブ・ラーニング・デー)」と定めると書いてありました。これを日本語にするのは、とても難しいんですけど、あえてするならば、「価値変化をもたらす学びの日」と定めたそうです。なぜならば、近藤紳子がキャプテン・ルイスに会ったのが1955年5月11日。そして私が変えられた。だから、この街はその日を宣言書に謹って定めたのです。

皆さん、ちょっと心を明るくしてほしいので、おもしろい話を一つさせてください。「first pitch ceremony (ファースト・ピッチ・セレモニー)」、分かりますか。ファーストは分かるわね、「一番」。ピッチは「投げる球」。そしてセレモニーは「式典」。ところが、この三つを一緒にして、私は意味がよく分からぬ。弟にこれどういう意味と聞いたら、「それは始球式だろ」。実は私、セントルイス・カージナルス、野球全然分からぬ。どうもアメリカにあるメジャーリーグっていうんですか、そのチームから、始球式を頼まれました。さ

て問題はボールを投げたことがない私。アメリカに行くまでに、一生懸命ボール投げの練習をして行きました。そして球団の人は、「ちょっと歩いてもいいですよ」と優しくおっしゃってくださったので、私自身としては2歩、歩いたつもりですけど、どうもNHKの「ニュースウォッチ9」を録画していたのを一生懸命、歩数を数えた友人がいて、「あれは2歩じゃない。2歩以上歩いた」って言われ、大笑いになったんですけど。ここで取り上げたのは何がすごいかというと、野球場ですよ、アナウンスがありますね。そのアナウンスで言わわれたことは、私が広島で被爆した。そして私の経験、何をして、どうだという話。ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』の話を全部して、最後、今彼女がしていることは、世界からの核の廃絶です。球場にいたみんな、暑い中、立ってスタンディング・オペーション。セントルイスという街、トルーマン・ストリート（トルーマン通り）というのがあるくらいの、その街がそうやって、私を迎えてくれた。背番号11番、なぜ私が11番なんだ、あとで説明を聞いたたら、私がキャプテン・ルイスに会ったのが、5月11日だからだそうです。見てください、生まれて初めての始球式。ちょっとかっこいいでしょ。原爆を投下する事を決めた大統領を高く評価する街が、被爆した私とキャプテン・ルイス氏の出会いを取り上げるとは、驚きました。

今に至るまで、キャプテン・ルイスや、パール・バック女士に出会い、良い思い出ばかりでした。しかし、一つだけ辛い思い出がありました。中学1年でしたか、2年、3年でしたかよく覚えていません。広島・長崎で被爆、原爆を受けた子どもたちが、ABCC、これは英語では、「Atomic Bomb Casualty Commission」、「原爆傷害調査委員会」です。放射能が人体にどういう影響を与えるかを検査する所、病院ではありません。病気があったとしても、治療はしてくれません、研究所です。小さい時から、私は爆心地から1.1キロメートルの所で8箇月で被爆した。だから、放射能がどういうふうに身体に影響があるかを調べる所に、ずっと行っていました。1年に1回、時には年に2回、小さい頃はそんなに嫌な思いもしなかった。しかし、あの日を境に、私は二度と行くことを止めました。まず行きますと、バスケットを受け取る、その中には綺麗にアイロンのかかったガウンと、そして布があります。その布はふんどし。下着も全て取り、それを付けてガウンを付けて、検査室に行く。あの日お医者様が、「今日はどこどこへ行ってください」。私は「はい」と元気に返事して行きました。行ったら講堂でした。その日、ザワザワとしていた。英語、フランス語、ドイツ語、いろんな言語が入ってきた。私でも「あっ、これは世界中の医者様たちの集まりだ。」というくらい察しがつきました。そうしたら、お医者様が「はい谷本さん、舞台の上に上がってください」。何か何だか分からぬけど上がった。「はい、ガウンを脱いでください」。実験用のモルモットのように、ガウンを脱いだ。右向け右、左向け左。思春期の私、身体が子どもの身体から大人の身体へと変わっていく。悔しかった。なぜ私はこのようなことまでしなければいけないのか。そして天井を見上げた、確かに私は、8月6日に広島にいた。しかし私があの戦争を始めたわけではない。なのに、なぜ私はここまでしなければいけないのか。私はその時、決心しました。「私はこれから生きていく間、

二度と私は広島にいたということは、他人に言うまい。そして、高校は東京に行き、大学はあの10歳の時、本当にパール・バックの家で、温かく迎えられたあのアメリカに、とにかく逃げて行きました。そして大学4年、奨学金も終わる、そうすれば日本に帰らなければいけない、日本にだけは帰りたくない。でも、親には、あのABCCでの検査のことは一切言ってないので、親には言えません。だって、それを言えば、特に父の場合は、アメリカで教育を受けた人、それを聞いたら、つらいだろうと思い、私はそっと心の中に納めていたわけです。「そうだ、日本に帰らないのには一つ方法がある。誰かと結婚して、もうアメリカで一生送ろう」。自分で決心し、親に長い長い手紙を書きました。その中でもABCCであったことは、一言も触れませんでした。婚約しました。すぐ婚約破棄となりました。理由は彼のおじさまがお医者様で、放射能が人体にどういう影響を与えるかを研究しているいらっしゃる方が、「Koko is no good.(紘子は良くない)、まともな子を産むことはできないだろう」ということで、全ては破棄となり、日本に帰ってきました。親は「町内で生き残った赤ん坊は、おまえ一人だから、広島のため、平和のために働いてほしい。」と言われば言われるほど、「私は嫌、私はしません。」と言っていました。ある日、東京から広島に修学旅行に来ていた高校生、制服姿の学生たちを見た時、自分の中学時代のあの日のことが思い出され、「二度とこの子たちに同じ思いをさせたくない」と思い、あの日の事を口にしました。その会場の一番後ろの席に座っていた、母、父、そしてやっと結婚した夫、三人が初めて聞く話だったんです。後で、彼らの目を見たら、何も言わない三人でしたが、涙で目が潤んでおりました。それから私は現在も続いておりますが、この若い人々に同じ思いはさせたくないという思いで、世界中を回っております。



複製禁止

2016年5月、オバマ大統領が広島に来られました。そのスピーチを、NHKから海外に向けて放送を頼まれていたものですから、NHK BSの人たちと一緒に、オバマ大統領のスピーチを聞きました。思ったより長いスピーチでした。ある箇所にきました。「えっ、いやいやいや、そんなことはない。そんなことは、いやこれは間違いだ」と思っているうちに、スピーチが終わりました。そしたら、その部屋にいたNHKの人たち、みんなが、「えっ、あれ、紘子さんのことでしょ」と言われた。オバマ大統領は名前をおっしゃらない。私かどうか分からない、でも、みんなはそれが私だと言う。そのスピーチの箇所、あえて

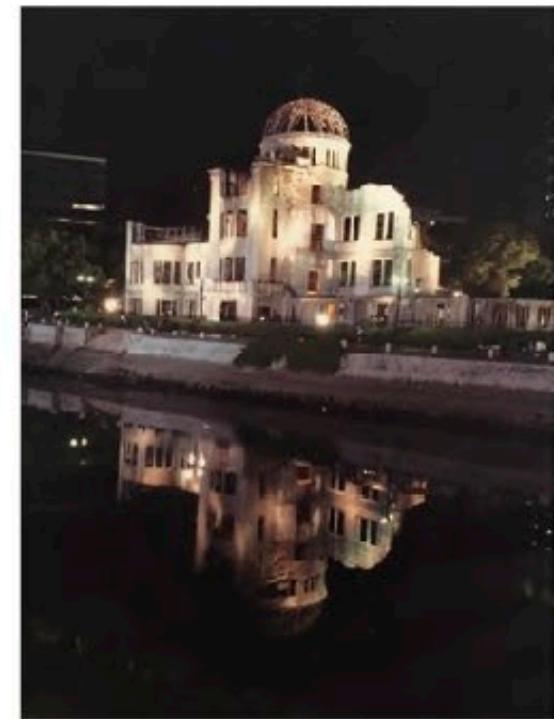
読ませていただきます。「私たちはこうした物語を、被爆者の中に見ることができます。原爆を投下した爆撃機のパイロットを許した女性がいます。なぜなら、彼女は本当に憎いのは戦争そのものだと分かっていたからです」。これが私かどうかは、分かりません。私より以前から多くの広島・長崎で被爆なさった被爆者たちは、世界に向けて、ずっとずっと、そして今現在も叫び続けています。あの戦争だけは、あの原子爆弾だけは、この世から無くなってほしいと。それは、私の祈りでもあります。

ここに私のいとこがいます。いとこは原爆が広島に落ちて二日目、山口から広島に食べ物を持って来ました。彼女はその年の冬亡くなりました。私は小さい時、血便・高熱、お医者さんもいない中、医学生がたまたま診てくれたら、「いやあ、この赤ちゃんは無理でしょう」と。しかし、私は今も生きている。命を与えられた。

長い間、私が理解できなかった一人の人、それは私の父です。40年近く牧会（ぼっかい）した教会での最後の説教を聞いて、やっと父が理解できた。彼は本にこのように書いています。「広島の被爆者のために役に立ちたいという願いは、あの地獄のような焼け野原の中で、助けてーという声を振り切って、自分の家族を案じて、彼らを見捨ててしまったという、エゴへの悔い。それと家族三人、無傷で助かったという、申し訳なさが、私を広島の被爆者のためにと推進させたのでした」。父は、あの日、家にはいませんでした。己斐（こい）という山の上にいました。そこから広島の町を見た。火があちらでもこちらでも上がってくる。最初に思ったのは「娘はどうしただろうか、妻はどうしただろうか、教会はどうしただろうか、町内はどうしただろうか」、一目散にせめて最後の教会、そして牧師館だけは見届けたいと思いつつ走っていく。川が7本流れている広島の町、橋がいっぱいある。でもその橋は壊れて渡れない橋もある。迂回しながら、多くの人たちの声、振り切った自分、それを彼はずっと心に入れ、それが悔いとなって残った。私はそれを聞いたとき、「あの一番大変な時、お父さんは私の事をちゃんと思っていてくれた。私にはできないけど、父が頑っていたならば、私も父が歩いた足跡を歩んでみたい」と思い始めました。ここに、ひとつの父・母からの贈り物がございます。これです。両親は、あの日着ていた私の服を大切に、大切に持っていました。

オバマ大統領、広島に来てくださった。外国人の多くは、広島に来るだけでも、その前にすごい決断をして来ます。広島の街に行けば、みんなにお前の国がやったと、いろいろ責められるのではないか。しかし、広島に着いたらどの人もこの人も、温かく迎えてくれた。オバマ大統領も、いくら彼が、あの広島そして長崎に来たいと思っても、大統領という地位にいる人はそんなになかなか自分の思うようにはいかない。やはり72年という年月

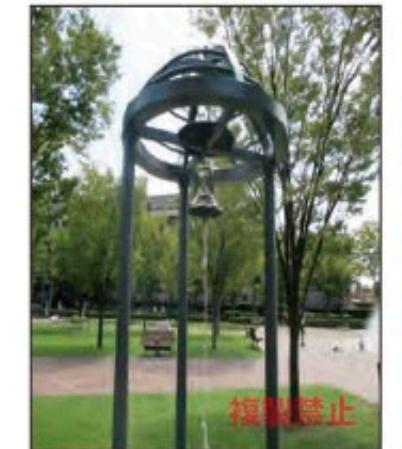
がアメリカの世論を変えていったのだと思います。社説でも、「オバマ大統領は広島に行くべきだ」と言う後押しがあったからこそ、彼は来られたのだと思います。小さい時、父が「世界を動かしたりすることは、とっても難しいことだ。でも人から人へ、草の根運動、これしか方法がない」と私に語った。もし、あのオバマ大統領が言った言葉、あれが、もし、私のことなら、それは私の話を聞いてくださった、お一人おひとりが、また、次の人に伝える。それが、もしかしたら、オバマ大統領のスピーチ・ライターに届いたのかもしれません。日本は広島・長崎を経験しています、体験しています。だからこそ、日本は、日本人は、世界に向けてはっきりと、核の廃絶を叫んでいかなければいけないと私は思っております。そして、次の時代を担う子どもたち、一人ひとり、与えられた命を最後の日まで、しっかりと生きていてほしい。そのためには、私たち、人から人へ繋いでいくことができればと思っております。



このドームの写真はオバマ大統領が広島を立ち去った後の原爆ドームです。本当に世界が平和でありますように。そして子どもたちが平和で、平和に生きていく様子。本当に今日は皆さんありがとうございました。(拍手)

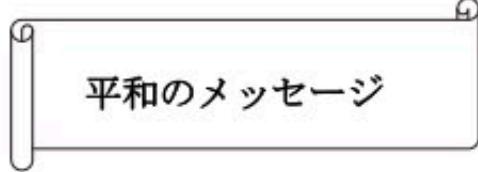
終戦記念日のつどい

とき 平成29年（2017年）8月15日（火）午後2時開式
ところ 末広中央公園 平和の鐘前
主催 宝塚市 宝塚市平和事業検討委員会、宝塚市原爆被害者の会 宝塚市
遺族会、宝塚ユネスコ協会 ハートフル合唱団



～～～ 次 第 ～～～

- 1 開会
- 2 黙とう
- 3 宝塚市長 あいさつ
- 4 宝塚市議会議長 あいさつ
- 5 平和の歌合唱
合唱 ハートフル合唱団
青い空は (作詞 小森香子 作曲 大西 進)
長崎の鐘 (作詞 サトウ ハチロー 作曲 古関裕二)
故郷 (作詞 高野辰之 作曲 岡野貞一)
- 6 平和のメッセージ
ぼくたちにできること 未成小学校6年 山本武志
ぼくたちにできること 未成小学校6年 南部愛斗
いつも気にかけておくべきこと 宝塚中学校2年 宮崎想来
平和への願い 宝塚市遺族会会长 川西武信
- 7 「平和の鐘」打鐘
- 8 宝塚市平和事業検討委員会代表 あいさつ
- 9 閉会



『ぼくたちにできること』



末成小学校6年 山本武志

日本は今、戦争をしていません。でも、世界では戦争や紛争、テロなどが起きています。テロの数は年々増え、ロンドンなどの大都市でも起きています。そこで、争いをなくすにはどうしたらいいか考えました。ぼくは「国と国とが助け合つたらいい」と考えます。

約130年前の話ですが、日本に来たトルコ人が帰る最中、トルコの船が沈没しました。そのとき、日本人が助けました。その後、約100年後、イランとイラクで戦争がありました。そこには、日本人もいました。そのときに日本人を助けたのが、トルコ人です。トルコ人は、「100年前のこととは、今でも忘れていません」と言っていました。ぼくは助け合いは大きなきずなを結ぶことを学びました。

ぼくたちにできることは困っている人たちを助けたり、平和の大切さを身近なところで伝える。

ぼくは自分にできることをして、少しでもいいからその国が平和になり、笑顔になってほしいです。

『ぼくたちにできること』



末成小学校6年 南部愛斗

ぼくたちは、広島に修学旅行に行きました。その時に原爆によって被害を受けた方の話を聞きました。その方は爆心地から1kmはなれた所にいました。当時の状況を想像すると、とてもおそろしくこわい気持ちになりました。しかし、実際はぼくの想像をこえるほど、おそろしいものだと思います。

戦争はおそろしくてこわいものです。そして、人の命をうばってしまうものです。

ぼくは、もう戦争なんてしたくありません。なぜなら、一つの爆弾、一つの武器でぼくたちから家族や自然、動物、そして友達までをもうばってしまうからです。

みんなが仲良く平和な世界であってほしい。ぼくの願いは、いつか必ずかなうと思います。ぼくに今できる事は、身近な所から、仲良くなっていく事だと思います。そのためにはクラスで手を取り合い、いじめをしないクラスにしていきます。ぼくたちから世界へ平和の輪が広がっていきますように。

『いつも気にかけておくべきこと』



宝塚中学校2年 宮崎想来

みなさんにとって平和とは何ですか？ただ当たり前のように過ごすことですか？それとも安心して生活を送ることですか？私にとって平和とは、世界中の人々が平等であることだと思います。では、みなさんにって戦争とは何ですか？ただ戦うことですか？それとも、人の自由をうばうことですか？私は戦争とは何かときかれたらいちに答える事が出来ませんでした。でも今は、戦争＝二度としてはいけない事だと思っています。七二年前の今日、長い長い戦争が終りました。その戦争はあまりにも残酷で冷酷でした。「ぜいたくは敵だ」なんて言われて、負けを認めなかつたのも私はこの國日本國が冷酷だったと思いました。資料を見ると、この人たちは人じやないのかな？と感じました。いくらお國のためとは言え敵を殺さなかつたら、自分が殺される。そんな国を作つたと思うとすごく胸が痛くなります。戦争中は今では考えられないことばかりでした。空のあちこちに戦闘機がとびかい、どこかでは火が上つていて…服も今みたいにちゃんと着れているかどうか。そして原子爆弾。私はこれまでに戦争について学校で学んできました。そのとき絶対に出てくるのが原爆。最初はおそろしいなとか怖いなと思っていました。今も、もちろんおそろしい、怖いもあるけど、一番は近々また使用されるのでは？と思っています。

まだまだこの世の中にはすべきことがあります。例えば核兵器をなくすこと。「全面廃止」などと言つてまだたくさんあります。一刻も早くなくしてほしいです。

私は、本を読んでいると、スコット・フィッツジェラルドの「気にかけておくべきこと」というのを見つけました。少し、紹介します。

いつも気にかけておくべきこと…勇気など

気にかけないでよいこと…大勢を占めている意見、人形、過去、大成功、ただの満足など

最後に気にかけておくべきこと…自分が何をしようとしているかということ。

私は、これを読んだとき、すごく感動しました。これは戦争に対しても私たちの普段の生活に対しても当てはまるなと感じたからです。

ではみなさん、みなさんにって平和とは何ですか？みなさんにって戦争とは何ですか？もう一度考えてください。そして、世界が平和へと一歩でも進むよう、気にかけておいてください。勇気。

自分が何をしようとしているかという事を。

平和特別講演会

とき 平成29年（2017年）11月23日（祝・木）午後2時開演
ところ 宝塚市立文化施設 ソリオホール

第1部 平和の作文朗読とスピーチ

1 平和の作文朗読



『ぼくたちにできること』
未成小学校6年 山本 武志



『ぼくたちにできること』
未成小学校6年 南部 愛斗



『いつも気にかけておくべきこと』
宝塚中学校2年 宮崎 想来

※作文の内容は19ページの「終戦記念日のつどい」に掲載しております。

2 平和のスピーチ

『第19代高校生平和大使～平和に国境はない～』 第19代高校生平和大使 森田 花菜



こんにちは、私は宝塚市に住む、大阪教育大学附属高等学校平野校舎2年の森田花菜です。まず、私が平和大使に応募したきっかけについて、お話をさせていただきます。私は宝塚市立宝塚第一小学校の6年生の時に修学旅行で広島県に行きました。そこで見た黒焦げの三輪車やお弁当、当時を再現したろう人形、そして原爆ドーム。そこには目を背けることのできない歴史がありました。また、宝塚市立宝梅中学校3年生の時に沖縄県に修学旅行で行きました。昭和20年3月26日、米軍は沖縄の慶良間諸島に上陸しました。沖縄戦では壕が避難場所として使われました。私たちはその中の全長270メートル、600人以上の負傷兵で埋め尽くされていた糸数のアブチラガマに行きました。

目を閉じて想像してみてください。真っ暗闇の中、負傷兵の叫び声が響くのを。沖縄に行ったあと中学校の文化祭で、沖縄戦をもとにした学年劇をやりました。

こうして私は国際平和に関心を持ちました。さらに、私の両親が青年海外協力隊としてボリビアで活動していたことを、よく聞いていたこともあり、高校生平和大使に応募しました。私は昨年の6月から、高校生平和大使として活動しています。6月の広島研修では、原爆資料館を訪れ、初めて被爆者の方から直接話を伺いました。当時12歳だった池田さんは、平和の原点は、他人の痛みを理解すること、分かろうとする思いやり、私たちの思いを伝えてくれる若い皆さん之力を感じているというメッセージをいただきました。被爆者の高齢化が問題となるなか、私が、この歴史を語り継ぐ使命があると思いました。8月9日には、長崎市平和祈念式典に参加したあと、原爆資料館を訪れました。8月9日ということもあり、原爆資料館は入館料が必要無く、多くの人がいました。外国の方も多くいて、この日は国を越えて平和を学ぶことのできる大切な日だなあと、実感しました。また、私は、当時10歳だった、下平作江さんから8月9日のことを聞きました。ピカッと光った途端に爆風が吹いてきて、岩に叩き込まれて気絶したそうです。だれもいないはずの防空壕には黒焦げになった人、眼球が飛び出している人、やけどをして、2倍3倍に膨れ上がっている人たちが、いっぱい入って来たそうです。下平さんや池田さんの思いを受け継いで、次の世代に語り継いでいきたいです。

その後私たち高校生平和大使は、大阪の梅田や千里中央で集めた署名を持って、スイスに8月13日から20日まで行きました。そこでは国連欧州本部や国連軍縮局、女性の社

会参画を目指すNGO「世界YWCA」、赤十字社の創始者アンリー・デュナン博物館などを訪れました。日本政府代表表敬訪問では、佐野軍縮大使に、核兵器廃絶における日本の立場について、考えを伺うことができました。佐野さんは日本の立場のふたつの柱は、唯一の戦争被爆国であるということ、そして、国際情勢を冷静に判断していく必要があるということを、おっしゃいました。唯一の戦争被爆国として原爆の悲惨さを訴えることの重要性を改めて学びました。国連では軍縮会議で日本政府ユース非核特使として、永石菜々子さんが高校生平和大使を代表してスピーチを行いました。今年は軍縮会議でのスピーチはできませんでしたが、広島・長崎のことをより世界に知つてもらうことができるので、来年こそは、軍縮会議で発表できることを願っています。軍縮会議では中国・ロシア・アメリカ・カナダの4カ国が、永石さんのスピーチや高校生平和大使に好意的な反応をしてくれました。特に印象深かったのは、中国から言わされたことです。中国は私たちに歓迎の言葉を述べたのち、その一方で、発言するだけではなく他国の意見もしっかりと聞くこと、そして、その経験を日本で少しでも多くの人に伝えることが大切とおっしゃいました。そして、歴史は憎しみを生むためのものではなく、過去の過ちを繰り返さないためにあるものだと。日本は被害者だけではなく加害者でもあるのです。この事実を胸に刻みながら、核兵器廃絶のために活動していきたいです。軍縮会議のち、国連軍縮部ジュネーブ支局長代行マリー・ソリマンさんに千羽鶴と署名を渡しスピーチを行いました。1年間で集めた署名は12万5,314筆でした。これは国連唯一の永久保存される署名といわれています。署名を集めるのは想像していたよりもとても大変なことでした。戦争を知らない若者に何ができる、そういう厳しい言葉を受けることもあります。でも微力だけど無力じゃない、これが高校生平和大使の合言葉です。高校生でもできること、ではなく、高校生だからこそできること、1筆の署名集めから始め、地道な活動をとおして、核兵器廃絶を目指していきます。私ひとりでは、何もできませんが、力を合わせれば無力ではありません。今年、ノーベル平和賞にI CAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)というNGOが選ばされました。核兵器廃絶への関心の高まりだと感じ、とても嬉しく思っています。一方で今、世界には1万5千発以上の核弾頭があります。そして核戦争などによる人類の滅亡を午前0時になぞらえ、世界の危機的状況に警鐘を鳴らす、世界終末時計は、2017年2月に残り2分半となりました。これは、米ソ冷戦時と同じです。「Peace can not be kept by force; it can only be achieved by understanding.(平和は力では保たれない、平和はただ分かり合うことによってのみ達成できるのだ。)」これは、AINシュタインの言葉です。核兵器や戦争からは、平和は生まれることはないのです。ありがとうございました。(拍手)

第2部 講演会

1 講 師

石田 優子さん（映画監督・『広島の木に会いにいく』著者）

2 講演テーマ

被爆樹の声をきいて、平和について考える～「広島の木に会いにいく」～

3 講師プロフィール

石田 優子



1978年東京生まれ。慶應義塾大学卒業。大学在学中から映画美学校にてドキュメンタリー作家佐藤真に学ぶ。その後映画製作会社シグロにて「エドワード・サイードOUT OF PLACE」（監督／佐藤真）の助監督などを経験。

漫画家・中沢啓治の被爆体験の証言を記録したドキュメンタリー映画「はだしのゲンが見たヒロシマ」（2011年）が初監督作品となる。

第17回平和・協同ジャーナリスト基金審査員特別賞などを受賞、国内外で上映が行われる。

ほかに、教材用DVD「はだしのゲンが伝えたいこと」（2011年）、「ルルド、車いすで歩く」（2014年）などがある。

4 講演の記録 「被爆樹の声をきいて、平和について考える

～「広島の木に会いにいく」～

皆さんこんにちは。今日、初めて宝塚に伺ったのですが、朝一番に職員の方に案内をしてもらい、市役所前の末広中央公園に植えられている2本の被爆樹木を見てきました。1本は長崎からの「被爆クスノキ」二世です。親の木は山王神社にある、とても大きくて素晴らしい2本のクスノキです。最近は福山雅治さんが歌にしました。機会があったら是非見に行っていただきたいと思います。それから、「アオギリ」の木が植えられていますが、これは広島からの被爆樹木で、5、6年前に植えられたそうですね。大きく成長しています。今は葉が全部落ちてしまっている状態ですが、種ができるうえで、二世の木から生まれたので三世の種ということですね。とても大切に育てられている木を見ました。

被爆樹木の種や苗は日本全国、世界へ届けようという活動が様々なグループによって進められています。宝塚でも三世の種がわけられているように、贈られた先でさらに新しい種や苗が生まれ、広められています。それは、被爆者の方々をはじめとした多くの方々の平和への思いが、被爆樹木の種や苗と一緒に、世界中へ届けられているということです。アオギリの種は発芽させ、育てるのが難しいですが、今日、皆さんと一緒に私も種を頂いたので、挑戦してみたいと思います。小さなアオギリを育てながらご家族やお仲間とお話ししていただければ良いなと思います。

●広島との出会い

《アオギリと沼田鈴子さん》

私は『広島の木に会いにいく』という本を書きましたが、主にしているのはドキュメンタリー映画制作です。今日はこれまで広島に通って取材をしながら感じたこと、考えたことをお話ししたいと思っています。



写真撮影・提供：石田優子

この写真は、宝塚の被爆アオギリ二世の親の木です。この木は広島市の通信局で被爆しました。幹にある傷痕が面しているのは、爆心地に向いていた部分です。熱線を浴びてやけどを負いましたが、今ではその傷痕を覆うようにまわりが盛り上がり、結果として洞（うろ）のような状態になっています。70年経った今でも、こういう形で傷痕が残っていることが分かります。

この木は現在、通信局から平和公園に移植され、平和記念資料館のすぐ脇に植えられています。種や苗が世界中に広まっている、最も有名な木だと言えます。木と同時に被爆者の沼田鈴子さんのお話は本や映画になっていて、良く知られています。取材で行く度に、世界中の方がこの木に会いに来ているのを目になります。

私は大学時代に初めて広島に行きました。はじめから自分で行きたくて、というよりは、友人に誘われ、女子大生2人のバックパッカーの旅でした。沼田さんという方にお話を聞けるよ、と教えてくれたのも友人です。沼田さんは原爆で片足を失い、当時は車椅子に乗っていましたが、たった2人の大学生のためにゆっくり時間を割いて、アオギリの木の上で、その体験をお話しくださいました。沼田さんはアオギリがあった通信局で被爆し、片足を失くしました。さらに戦地に行った婚約者も亡くし、つらい思いを抱え、生きる希望を失いました。そんな時、このアオギリが再生し、緑の葉を出している姿を見て、勇気を得ました。「もう一度生きよう」と思われた。沼田さんは生涯結婚されず子どもはいません

んでしたが、話を聞きに来る子どもたちに、「平和の種」を植えるような気持ちで語り続けた方です。お元気だったころの沼田さんの証言をご覧ください。

【沼田鈴子さんの証言映像】

《植物の再生が生きる力に》

広島市の被爆樹木は登録されているだけでも 170 本ほどあります。アオギリは代表的な木ですが、それぞれの木に対して思いを抱いている方がいます。原爆によって大勢の方が家族を失い、自身も傷つきました。町もすっかり破壊されてしまった。その上、広島には 70 年間草木も生えない、という話が広まったそうです。ところが、すべてが死んだような乾いた赤茶色の景色の中に、しばらくして草が生えだしました。原爆の 2 箇月後、米軍によって撮影された写真を見ると、木に新しい芽が出ているものが確認できます。赤茶色の景色の中に植物の緑や、花が咲いているのを見たとき「ああ、生きていける」というふうに思ったと語る方は、一人ではありません。食べるものが無かったので、鉄道草という草を食料にしたという話をよく聞きます。植物が新しく芽を出したということが、当時大変厳しい状況にあった人々にとって、「生きること」そのものだったのです。



写真撮影・提供：石田優子

これは、報専坊（ホウセンボウ）というお寺ですが、爆心地に近く、当時木造だった本堂は爆風で倒壊し、その下敷きになった方が亡くなりました。ご住職も原爆症で亡くなってしまった。家族が皆亡くなったけれど、唯一生き残ったイチョウの木をお寺の息子さんはとても大切にしていました。寺社にはイチョウが植えられていることが多いのですが、イチョウは水分が多く火災の延焼を妨げるという役割があり、火伏（ヒフセ）の木と言われています。このイチョウの木が本堂の前にあったために、本堂は倒壊しながらも火災で焼失することは免れたそうです。その後、本堂を再建しようとなった時、敷地の問題があり、このイチョウを切るという建築案が出たそうです。お寺の方と門徒の方々とで話し合

いがされた時、「この木は子ども時代から知っていて、よく遊んだ」「原爆で生きていけるかどうか分からないような状態のとき、このイチョウが生き続けてくれていたから、私も生きる元気をもらった」という声がありました。話し合いの結果、木を移植したり切ったりするのではなく、このままの場所で生かそうということになりました。そして、木の周りを U 字に囲むように階段を作り、イチョウの木を寺のシンボルとして残したのです。このお寺のほかにも、古い大きなイチョウの枝を切らずに残そうと、山門の屋根をくり抜き、枝を突き抜けさせるようにした寺があります。そんなふうに街の中、人々の間で被爆樹木は大切に思われ、守られています。

《「はだしのゲン」中沢啓治さんとの出会い》

私が広島を取材することになった話に戻ります。広島に行ったのは学生時代の一度だけで、社会人になり、映画の製作会社に勤めるようになって、10 年程が経っていました。ある時、高齢化が進む被爆体験・戦争体験のある方々の証言をとにかく急いで記録に残そうというプロジェクトに関わることになりました。広島で平和のための活動を続けている方と東京からの映像制作のスタッフが協力し合うものです。私は現場では録音のスタッフとして取材を手伝い、東京に帰ってきてからは編集をするという役割でした。先ほどの沼田鈴子さんの映像は、そのプロジェクトから出来たものです。

その取り組みの中で漫画『はだしのゲン』の作者、中沢啓治さんの証言を記録させていただきました。中沢さんの被爆体験はとても力強いもので、撮影後、より多くの方にこの証言を届けるにはどうしたら良いだろうかとスタッフで話し合いました。それでは映画化しようということになり、生まれたのがドキュメンタリー映画『はだしのゲンが見たヒロシマ』です。漫画の主人公のゲンそのものである中沢さんが、自身の本当の被爆体験を語ります。ご覧ください。

【映画『はだしのゲンが見たヒロシマ』の一部】

映像では中沢さんの被爆体験を聞いていただきましたが、その後、中沢さんは自身の健康に不安を感じながら、成長していきます。子どもの頃から絵が大好きで、漫画家を目指して上京します。その当時は「原爆」という文字を新聞で見るだけでも嫌だ、というほど「原爆」から目を背けていたそうで、子ども向けのギャグ漫画などを描いていました。その中沢さんが、やはり「原爆」に向き合わなくてはいけないと、『はだしのゲン』を描きあげました。私たちの取材中、中沢さんは目が悪くなられ、漫画を描き続けることができないと、事実上の引退宣言をしました。「漫画を描けないけれど、今度は語ることで戦争・原爆と戦うんだ、核兵器は絶対無くさなくてならない」ということで語り始めた時でした。そしてこれが、最晩年の中沢啓治さんの記録となりました。

実はこの記録を映画化しようとなり、「石田が監督したらいいじゃないか」という話になった時、私にとってこのテーマは大き過ぎるんじゃないかなと悩みました。私は東京で生まれ育ち、広島とは何の縁もありません。原爆のことをテーマに映画作りをする資格がある

のだろうかと思ったのです。考えてみると中沢啓治さんは、日本中・世界中の戦争を知らない子どもたちに向け、児童漫画にこだわって『はだしのゲン』を描いた方です。私自身も読者のひとりであるわけで、戦争・原爆を知らない、広島も知らないけれど教えてもらいたい、そういう気持ちで中沢さんの話を聞き、映像をまとめたらいいのではと考え、この作品を完成させました。何の経験もない若者に対し、「思いっきりやってみなさい」と中沢さんが背中を押してくださったことが有り難く、非常に心強かったです。中沢さんはご自身も映画監督をされて、映画が大好きな方です。色々と意見があつてもおかしくないはずですが、「あなたが思いっきりやればいい、途中の編集段階では見ない。完成したものを見ます」というふうに言ってくださったことを忘れられません。中沢さんの晩年は、癌になり入退院を繰り返されていましたが、それでも亡くなる直前まで語り続けました。

アオギリの沼田鈴子さんも亡くなりました。その頃ようやく私自身が少し成長し、変わったのだと思います。それまでの私は若い世代として与えてもらえばかりでした。中沢さんは、「何度も話をするから、いつでも聞いていいよ」と言ってくださり、繰り返し話を聞かせてもらい、協力していただきました。中沢さんや沼田さんから、とても大切な思いや時間を頂いていたことに、やっと気がついたんです。それでは今度は私ができることは何だろうと、考えようになりました。私のできることは映像の中に中沢さんや沼田さんの平和への思いを生き続けさせることではないか。今日のような場で見てもらい、話をすることで、より若い世代の方に届ける・伝えるということが、私にできる恩返しになるのではないか、という思いを持つようになりました。映画の公開後、自分なりに広島のことをもっと掘り下げて取材したいと考えている時、被爆樹木の存在に気づいたのです。

●被爆樹木とは何だろう

《広島城のユーカリ》

中沢さんの漫画に、『ユーカリの木の下で』という作品があります。1977年、被爆者である男性が息子を連れ、25年振りに広島へ帰ってくるというストーリーです。ここに描かれている、原爆を生き延びたユーカリは、現在も広島城に生き続けています。この木のもとで、男性は息子に自身が被爆者であること、息子が被爆二世であることを伝えます。そのために将来、心無い人から差別を受けたとしても、決して負けてはいけないと、自身の被爆体験を語ります。図書館でも読むことができると思います。とても良い作品なので、是非読んでいただきたいと思います。



広島城跡二の丸のユーカリとマルバヤナギ

撮影者：林 重男 提供者：広島平和記念資料館

これは被爆後、1945年10月のユーカリの姿です。空に向かって真っすぐ幹が伸び、枝をほとんど失った状態で残っていますが、現在の姿とは大きく違います。この場所は爆心地から750メートルほどの至近距離にあります。猛烈な爆風と火災の中を生き残ることができたのは奇跡的だと思います。周りにあった木々は爆風で折れ、黒焦げになっています。よく見ると、あたりに草が生えているのがわかります。近づいてみると、ユーカリの木にも葉が出ています。木というのは危機的な状態になった時、こういう形で葉を出すそうです。呼吸するために、木は一生懸命葉を出し、原爆後2箇月でこのような状態になったのです。

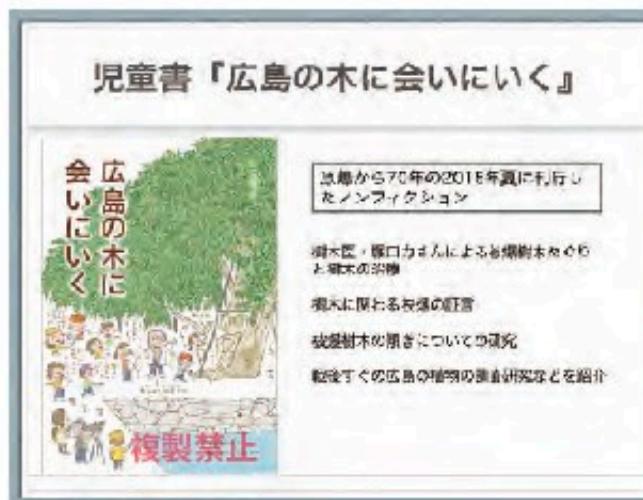
ユーカリは生命力の強い木です。オーストラリア原産であることは、皆さんご存知だと思いますが、様々な種類のユーカリがあり、これはコアラが食べない種類です。実はこの木は原爆で危機的な状況を乗り越えたあとも、何度も台風に襲われ、幹が折れるなどしました。「この木が生き続けることは無理だろう」とまで言われましたが、そのたびに見事に再生した、大変生命力の強い木です。現在は幹も枝もうねるようにして伸びていますが、先程の原爆2箇月後の写真では真っすぐに幹が伸びていましたね。当時の幹は台風で折れて失われ、今ある幹というものはこういう形で曲がりくねって伸びている。この状態について、もと東京農業大学の林隆久教授は、熱線の影響なのか、もしくは、放射線の影響も考えられるのではないかということで注目していましたが、木を研究するには非常に時間がかかることがあります。まだ結果が分かっていません。ですが、大きくもとの形から変わったユーカリの木は、何かしら原爆の影響を受けていると考えられます。もうひとつ、生命力の強さのあらわれとして、根元にある石垣がグイグイと押し出されて、出っ張っているような状態です。根張りが本当にしっかりとしています。



写真撮影・提供：石田優子

現在のユーカリの木の様子を見た樹木医（木のお医者さん）の堀口力さんによると、大変勢いが良い、まだ生き続けることができる木だということです。近づいて見ると、一本の枝の中に丸い葉と細長い葉があります。日本にはない、珍しい特徴だそうです。ユーカリの葉は良い香りがして、精油として香りを楽しむこともできます。近づくことができる

木なので、是非葉を触ったり、ユーカリ独特の臭いを感じたりしてもらいたいです。表面の皮がはがれていますが、オーストラリアでは山火事が多いため、ユーカリは火災に強いと考えられています。火がせまった時、樹皮が焼け落ちることによって幹が守られる、そういういた働きがあるようです。原爆の炎の中を生き抜くことができたのは、火災に強い種だったということが、ひとつあると思います。今のところ、木が弱っていることはないで、柵もなく、近づくことができます。木の下に入り込み、枝がクネクネしている様子を見ることができます。木に近づく時はそっと近づいて、優しく触ってください。木にとって根は非常に大切なですが、人が根を踏んだり、周りの土を踏み固めてしまうと、根が呼吸できず、苦しい状態になるそうです。生きている被爆遺産にここまで近づけるのは、被爆樹木以外にはないと思います。例えば原爆ドームは崩れたりして危険ですから、中に入ることはできませんね。この被爆樹木は実際に触れ、その温もりを感じることができます。訪れた際には是非近づいてみてください。



この本は児童書ということもあり、木の周りに楽しい雰囲気で人が集まっている様子を描いてほしいと、編集者は依頼したのですが、日野さんは「ここの場所がどういう状況だったか想像すると楽しい絵は描けない」と、非常に悩んだそうです。日野さんのご家族も原爆にあります。編集者と話し合って、子どもたちが木の下で学んでいるような様子だったら、ということでこの絵が描かれました。子どもにも、できるだけ入りやすいようにしながら、戦争・原爆を伝えるというのは、どうしたことなんだろうと、同世代の編集者や映画作りの仲間と一緒に悩み考えるところです。こういう思いで関わってくれる広島の方がいたことで、私たちはとても助けられました。子どもたちに届ける、受け入れてもらえるようにという気持ちで、こういったカバーが描かれました。ちなみにここに取材中の私が描かれています。今は編集中ですが、被爆樹木をテーマにしたドキュメンタリー制作をしています。カメラマンと私と、非常に少ないスタッフでの映画づくりです。

この画像は『広島の木に会いにいく』(偕成社) の表紙カバーですが、広島城のユーカリが描かれています。中心にいるのは、樹木医の堀口さんで、子どもたちに木の様々な特徴について話しています。この可愛らしいイラストを描いたのは、広島のイラストレーターで、エディット・キーの日野唯史(ヒノタダシ)さんという方ですが、実は、本を作るとき編集者とこんなやりとりがありました。

《爆心地から考える》

1945年8月6日、広島に原爆が投下されました。爆心地について考えますが、これは上空から撮影された写真です。T字の形をしているのが相生橋です。上空からこのT字が分かりやすかった為に、原爆投下の標的とされたと言われています。相生橋のたもとには、爆心直下となった原爆ドームがあります。1945年10月頃に撮影された、皆さんよくご覧になっている原爆ドーム周辺の写真です。驚くことに既にパラックが建てられ、川本商店という自転車屋が再建されています。娘さんの川本喜代子さんからお話を聞かせていただきました。原爆当時は妹さんが留守番をしていたそうですが、一瞬にして命を失くしました。小僧さんとして働いていた方々も亡くなりました。現在この場所というのは、平和公園の一部になっていて、多くの方が散歩をしたり写真を撮ったりしています。しかし川本さんにとっては、以前暮らした町であり、妹さんのお墓のような場所である、その上を皆さんが知らずに歩いていることに、複雑な思いを抱いていると語られました。川本さんはよくこの近くを通るけれど、つらいので家があった場所には近づかないそうです。観光客が楽しそうに記念撮影をしている様子を見つめながら、「皆は気がつかないと思うけど、ここは住んでいた人にとってはお墓に近い意味合いのある場所なんだ」と語られました。

《熱線と爆風の影響》

原子爆弾の特徴は「熱線」と「爆風」、「放射線」です。この写真を見てください。電柱に葉の形をした影が映っています。手前に葉があった部分が白く残りましたが、周りは熱線で黒焦げになりました。この熱線が人間にあたった場合どうなるか想像してみてください。



電柱に熱線を受けてできたヤツデの影

撮影者：米軍 提供者：広島平和記念資料館

ちょっとつらい写真ですが、熱線を直接浴びた人は、このようにひどい火傷を負いました。原子爆弾は、地上ではなく、上空 600 メートルで炸裂しています。ですから、その瞬間、野外にいた人は、上空からほとんど直接に熱線を受けました。

爆風について、この写真は、国泰寺(コクタイジ)にあった大クスノキです。樹齢 300 年ほどで、町の人々に大変親しまれていました。路面電車が走る線路は、この大クスノキ

の根を避けるよう、湾曲させて敷かれています。歩道には段差がありますが、人が歩く時も根を踏みつけないようにとの配慮がされ、大切にされてきた大クスノキでした。ところが、原爆でこのような状態になってしまいました。クスノキは何本かありましたが、これだけ太い幹でさえ爆風で倒れたのです。それからひどく焼けています。もうこの段階で死んだという話もありますし、その後しばらくしてから、芽を出したという話もありますが、これらの木は切られることになりました。本来であれば神の木のように思われ、樹齢 300 年を超えて永く人々に親しまれながら生きることができたはずです。

火災の被害について考えます。この写真は、爆風によって傾いたコンクリートの建物です。多くの木造の建物はペシャンコになりました。その後火災がおきました。これは、被害状況の地図（原爆被災地図）ですが、爆心地すぐ近くに原爆ドームがあります。爆心地から半径 2 キロメートル辺りまでが、ひどく被害を受けている、全焼エリアと建物倒壊エリアです。爆心地から東へ 1.8 キロメートルの比治山には木がたくさんあったため、ここで火災がくい止められました。山で遮られた反対側は、爆風の影響はあったものの、焼けずにすみました。原爆直後から、多くの人が中心部から外へ外へと向かって逃げました。その時、木がある場所が逃げ場となつたのです。比治山には多くの人が逃げ込んだそうです。やけどを負って木の下に横たわったまま、たくさんの人が亡くなつていていた状況でした。

《被爆樹木はどこにある？》

広島市ではおおむね半径 2 キロメートルまでに残るものが被爆樹木として登録されています。主にお寺や、通り沿い、川沿い、学校の校庭などの、公共の場所にある木で 170 本ほどあります。一般の民家にも被爆した木が残っていますが、それらは登録数に含まれていません。長崎市では、より範囲が広く半径 4 キロメートルまで、民家にある木も登録されています。ただ、民家にある木は、住所がオープンにはされていませんので、自分たちで歩いて訪ねるというのは難しいです。広島の場合は所在地が出ていますし、被爆樹木のマップも手に入れることができます。もちろん長崎にも所在地が出ている素晴らしい木があるので、見に行っていただきたいと思います。

被爆ということをどう考えるか、広島では、爆心地から半径 5 キロメートルまでの広さにあるものを、被爆建造物としています。全壊エリアを超えて爆風が吹いたり、黒い雨が降ったりと、本当は単純に線を引けないことがあります。黒い雨を受けている木は、被爆樹木なのかどうかを考えると、私はやはりこれも被爆している木だと思います。街を歩いていると、お話を聞かせてもらうことがあります。戦争や原爆の物語を持っている木があります。誰かにその物語を見つけてほしいと、待っている木があるようにも思います。皆さんが歩かれた時に、そういった木と出会うような機会があると良いなと思います。

《復興、緑をとりもどす》

全てが乾いた赤茶色になり、緑が失われたところから、広島は復興し、緑を取り戻して

いきます。このイラストは現在の広島ですが、もともとは町があったところが平和公園となり、現在たくさんの木が植えられています。比治山からまっすぐ平和公園に向かってあるのが、平和大通りです。100 メートル幅があるので、100 メートル通りとも呼ばれています。ここにもたくさんの緑があり、緑地帯となっています。これは広島城の緑です。こちらには、縮景園（シュッケイエン）という日本庭園がありますが、もともと木が多く、原爆直後はたくさん的人が逃げ込みました。大きなイチョウの被爆樹木がここに残っています。平和公園の中に、とても小さく描かれていますが、アオギリの木があります。



写真撮影・提供：石田優子

平和大通りは、もとは空襲による火災の延焼を防ぐための防火帯として作されました。建物疎開と言いましたが、建物を壊して道幅を大きく広げて防火帯としたのです。戦後になって、これを平和大通りと名付け、木をたくさん植えたのです。供木運動といって、近隣の村などから木をもらい受けました。これは平和大通りを作っている頃の様子ですが、現在はこんなふうに木が大きく成長しています。実は、この時植えられた木は、各地域からの様々な種類の木なので、不揃いです。いろいろな形に伸び、70 年経つ大きな木があれば、小さな木もあります。これを美しくないという考え方もあり、種類を揃えて、きれいな並木道にした方が良いのでは、という話もあったそうです。しかし平和大通りの背景を考えると、その良さというのは不揃いであることで、この姿を大切にしようじゃないかと、現在もこのような形で緑地帯が広がっています。この中にも被爆樹木があります。歩いてとても気持ち良い通りです。

話が被爆樹木から離れますが、この写真は東京浅草の浅草寺の被災樹です。関東大震災や空襲を生き延びたイチョウですが、大きく焼けただれた傷痕が確認できます。こういった被災樹は全国各地にあるわけで、関西の方にもあると思います。被爆樹木にかかるわらず、戦争の記憶、災害の記憶を持っている木を大切に残し、物語とともに未来に向かって繋げていくことができたらと思います。

●樹木医・堀口さんの仕事

《衰えたソメイヨシノの治療》

被爆樹木の話に戻ります。樹木医、木のお医者さんという職業があるのですが、樹木医の堀口さんは、30 年にわたって広島の被爆樹木を守り続けてきた方です。この方との出会いが無ければ、本をまとめることもなかったと思います。比治山に、山陽文徳殿という建物がありまして、ここには衰えた被爆ソメイヨシノ、桜の木が残っています。この建物も被爆建造物で、屋根にある九輪（クリン）は爆風で歪んだまま残っています。ソメイヨシノは樹齢が長い木ではなく、100 年前後といわれています。戦後 70 年以上経ち、木はそれ以前からあったわけですから、100 年に近いような樹齢の木だということになります。戦後、頑張って生きてきたけれど、寿命も近づき、力を出し切ったのかもしれません。



写真撮影・提供：石田優子

堀口さんはこの木の治療を続けています。腐りが進んで洞（ウロ）のようになったところに、ピートモスという苔でできた素材を詰め込みました。木を治療する時にコンクリートや樹脂など、人工物を使う方法もあるそうですが、堀口さんは、できるだけ自然な形で木を生かしたいと、自然の素材を使って治療をしています。ソメイヨシノは腐りやすい木で、今生きている部分は幹の 2 割から 3 割しかありません。木の周りの土に養分を与え、不定根（フティコン）と言いますが、幹の中に根が育ちやすいようにしてやることで、木の命を続けようとしています。私は木のことは素人ですし、こういう風にバランスが悪くなつて、衰えた桜の木を見ても、これまであまり気に留めるようなことがありませんでした。でもこの瀕死の木に出会い、堀口さんが大切に治療をする様子を見たとき、はじめて気持ちが動きました。この木に頑張って生きてほしいという思いを持ちながら、この数年間取材を続けています。雨の多いときに大きなキノコが出てしまったり、伸ばしたいと思っていたヒコバエがうまく伸びなかつたりと、治療はなかなか思ったとおりいかないので、ソメイヨシノは頑張っていて、僅かながらもこの年も桜の花を見せてくれました。本当にありがとうございますという感謝の気持ちが湧いてきます。

《木の生命について考える》

堀口さんは「木にも尊厳がある」ということを語っています。木は幹が空洞になって、皮一枚でも生きていけます。ですから周りを固めたり、削ったりして、木のもともとの形を壊しても、とにかく命を続けるという処置はできないこともないそうです。しかし、木はこれまで十分頑張って生きてきて「もう疲れたよ、そこまでして欲しくないよ」と思っているかもしれない。そういうことまで考えながら、木の治療の進め方を決める方です。私は堀口さんの木との向き合い方に感銘を受けました。様々な種類の被爆樹木があり、70 年が経っています。樹齢が短い木もあれば長い木もあります。環境が良い場所に生きている木も、そうでないものもあり、死んでしまう木もあります。堀口さんは木が種を作つて二世・三世が生まれていくのも、静かに終わろうとする木のことも大切に見守っています。

これは、広島城のお堀端にある被爆クスノキです。脇道がランニングコースのようになっていたため、根の周りの土が踏み固められ、木が弱っていました。堀口さんは、根の周りに新しく柵を設けることで、根を守るようにしました。被爆樹木は爆心地の方向に面したところに傷痕があるものが多いのですが、すべてがそういうわけではありません。このお堀端のクスノキの場合は爆心地とは反対側にあった建物火災の影響を受け、やけどの痕を残しています。この傷痕のちょうど裏側の根本からは「ヒコバエ」と言いますが、若い芽がでています。だんだんと衰え、調子が悪くなつた木の中には、新しい芽を出すものがあります。うまくヒコバエが成長すると、新たな幹となって、生まれ変わることができます。一般的な剪定の考え方としては、見かけが良くないのでヒコバエは切ってしまうものだそうです。しかし堀口さんは元の木が徐々に衰えてダメになったとしても、ヒコバエが大きく育つて新しい命を続けられるよう、新しいといつても同じ DNA を持つた幹が生まれるのですが、そのために敢えてこのヒコバエを残すようにしています。



《被爆直後の植物を調査した学生》

勝田神能（カツダシンノウ）さんは、原爆の時は広島文理科大学（現広島大学）の学生さんで、原爆投下すぐの、広島・長崎の植物の被害状況と再生の様子を調査し、記録を残

した方です。当時写真は高価でしたから、詳細なスケッチでの記録です。爆心地から半径6キロメートルにわたって、22地点をたった一人で調査しました。当時は、GHQによる厳しい報道規制があったために、勝田さんが調査した資料を研究室に持ち帰って置いておくと、没収されてしまうかもしれない、という状況だったそうです。ですから勝田さんはこの調査をしている間は研究室に帰らずに、野宿をしながら植物をスケッチしました。本当に食べ物も何もない大変な状況だったと想像できますが、被爆した植物のことをやらなくてはいけないと、情熱をもって調査に挑みました。被爆後の植物の状態がここまで丁寧に記録されたものは他に残っていません。

勝田さんの記録によると、原爆直後に芽を吹いた木は、結構あったようです。しかし直後は頑張って芽を出したけれども、翌年になると力を出し切ったのか、死んでしまった木もありました。その中で、現在170本が生き残っているというのは本当に奇跡的で、大変頑張った木だと言えます。取材でお会いしたとき、勝田さんは高齢ですし、認知症の症状もあったので、家族の方に協力してもらい、話を聞かせていただきました。三重県の鈴鹿市で高校の生物の先生をされていました。広島と長崎で調査をし、被爆した植物を持ち帰ってきて生徒たちに見せたこともあるそうです。「広島・長崎のあらん限りのことを伝えようと思った」と語られたことが忘れられません。

ここで、現在制作中の被爆樹木をテーマにしたドキュメンタリー映画の予告編をご覧ください。

〔映画『被爆樹（仮題）』予告編〕

●広島の街を歩いてみよう。

《爆心地近くの木》

広島を歩くときには、爆心地はどの方向で、どれくらい距離があるのかということを意識してもらうと、良いかと思います。青少年センターの近くにあるシダレヤナギは、爆心地に最も近い位置に残っている被爆樹木です。あまりに爆心地に近いため、広島城のユーカリのように幹が残ったのではなく、地上部は全て吹き飛ばされて無くなつたであろうと考えられています。土の中の根が生き残っていたために、再生して新しい幹を出して生き伸びた。これが爆心地近くの被爆樹木に見られる状況です。

平和大通り沿いにあります愛宕池（アタゴイケ）のカキは通常と異なる形をしています。カキは普通一本立ちであって、根元から幹が分かれて生えることは考えられないのですが、爆心地近くで、やはり地上部が失われて、根だけが生き残り再生した。そして根元から幹が分かれるような生え方をしたのではないかと考えられています。

《木を観察する》

被爆樹木というのは、一見、普通の木とは変わりません。「この木は被爆樹木です」というプレートが付いていますが、プレートが無ければ、そうだと気づくのは難しいです。

観察する時には、まず爆心地の方向を意識しながら幹を見ると、やけどのような傷痕が残っていることがあります。それから、木肌の様子が違う、荒れているようになっていることもあります。爆心地側の幹はペタッとしているのに対して、反対側の幹は少し丸みを帯びている、さらに反対側は根張りがしっかりとしているという成長の差もあります。本当に僅かな違いです。すべての木が同じような特徴を見せてはいませんが、よく観察すると、これらの特徴を見つけることができます。これは、木そのものが原爆の傷痕をその形に表し、自ら語っていたということが分かってきたということでもあります。これまででは写真や人が語ることによって、被爆樹木だということが認識されてきたのですが、最近になって研究者による調査がされるようになりました、はじめて被爆樹木の特徴が見えてきました。



（イラスト：エディット・キュー）

●樹木を通して：ある場所の記憶をたどり、未来を見つめる

《広島城についての証言》

広島城には数本の被爆樹木が残っています。原爆が投下される前の広島城上空からの写真を見ると、木が生い茂っています。天守閣があって、ここが大本営だった場所ですね。ところが原爆投下後の写真では、ほぼすべての木が失われています。天守閣は、爆風で倒壊しました。これが現在の写真、緑が戻りました。天守閣も再建されています。この辺りが大本営の跡、ここにあるのがユーカリです。絵地図で見ると、クロガネモチ、ユーカリ、マルバヤナギ、クスノキというふうに広島城周辺にこれだけ被爆樹木が残っています。

これは広島城内の大本営近くにあるクロガネモチです。この木は大変美しく風格のある名木です。赤い実をつける時期は特に美しいです。もとは大本営の前に車回しがあり、その植え込みの中に生えていた木です。

次はマルバヤナギですが、幹の周りに麻紐を巻いています。幹の中心が空洞になってしまい、大きな2本の枝の重みで、幹が裂けてしまいそうだということで、腹巻するようにグルグルと紐を巻いて、保っています。木が危ない状況のときに生やすヒコバエ、胴吹（どうぶき）を切らずに生かし、不恰好ではありますが、次の命につながるようにと堀口さん

が見守っています。これは葉がたくさん出ている夏のマルバヤナギの様子ですが、葉を落とした季節は、被爆樹木の傷痕の様子をよく観察することができます。緑のときも、葉を落とした季節もそれぞれに観察できることがあります。

原爆ドーム前の自転車屋さんで育った川本さんは、子ども時代はドームに登って遊んだ、なんていう話もしてくださいましたが、広島城のことも伺いました。当時は軍都広島の中心は広島城でした。兵隊さんにあいさつすると、「入って良いよ」と敬礼を返してくれて、子どもたちは中に入って写生をしていた。木がたくさんあって、池や花が美しく写生するのに良い場所だったのです。練兵場へも入って遊んだそうです。兵隊さんに「乗せて」と、単葉機に乗せてもらって、飛んでもらうようなこともあったそうです。まだ穏やかだった時代の話です。ところが、岡ヨシエさんという方ですが、戦争が厳しい時に女学生時代を過ごした方です。広島城の地下壕で、学徒動員として24時間態勢で軍の通信の仕事をしていました。岡さんは8月6日の朝、その地下壕で仕事をしている時に原爆にあります。「広島が壊滅した」という市外へ向けての第一報を送った女学生として、よく知られている方です。残念ながら、今年お亡くなりになりました。岡さんによると、原爆当時、地下壕にまで火が迫ってきたため、壕を出てクロガネモチがある大本営前に逃げたそうです。池があって、花がきれいで子どもたちが写生をしていたと川本さんが話したその場所が、大変な状況になりました。岡さんの証言映像をご覧ください。

【岡ヨシエさんの証言映像】



現在の広島城は、緑が多く、観光客がたくさん来ていて、原爆当時、このような恐ろしいことが起きたということを想像するのは難しいです。岡さんは、炎のなかで近くにあつたであろう、クロガネモチのことは覚えていませんでしたが、この木はものすごい炎の中を生き残ったわけで、岡さんと同じように大粒の黒い雨を受けた被爆樹木であることが証言から分かります。樹木医の堀口さんによると、20年ほど前、このクロガネモチにまだ被爆樹木のプレートが付いていない頃ですが、修学旅行生などによる、幹にイニシャルや相合傘を彫る、落書きが目立っていたそうです。堀口さんが考えて、「これは原爆を生きた木

です」という看板を付けたことで、イタズラが無くなつたそうです。現在もうすらと、彫られた跡が幹に残っています。忘れてしまうと、そういったことが起きてしまう。木の物語を語り続け、これは原爆を生きた木なんだと、大切にしていかなくてはと思います。私はある場所を取材するにあたり、原爆の時の状況だけではなく、原爆以前の町の人たちの暮らしについて聞くようになっています。どんな暮らしが奪われたのか、どんな人の命が失われたのかということを、丁寧に聞いていくと、広島の方々の気持ち、樹木がおかれた状況に気がつくことがあります。

● 「広島の木」が未来に伝えること

《原爆を伝える資料》

今日は、スピーチで参加されている学生の方もいらっしゃいますね。広島のことを調べたいと思った時、こんな資料があるよという紹介ですが、ひとつには写真資料、航空写真があります。原爆後、町が焼けてしまった状況、木がどんな状態で残っていたのかを確認できます。原爆前の広島の写真を探すのが難しい理由は、多くが焼失してしまっているためです。公文書館、平和資料館などには、米軍が撮影した写真や、絵はがきとして残っている原爆前の写真などがあります。平和資料館では展示だけではなく、調べたり問合わせできる情報資料室もあります。資料館のウェブサイトからは、様々な資料を検索することもできます。

また、市民が描いた絵画というものがあり、非常に多くを語っている貴重な資料だと思います。縮景園には原爆を生きた大イチョウがありますが、この場所は木が多く、たくさんの人が逃げ込みました。現在の写真を見てもらうと、この日本庭園の池には特徴的な橋がありますね、覚えていてください。次に市民の方が描いた絵をご覧ください。同じ橋がある池です。この池の周りにこれだけの人が、水を求めて避難しました。翌日の8月7日、水を求めて倒れこんだまま、みんな亡くなっていました。このように原爆直後、写真には収められなかった状況が絵として残されています。一般の方が描いた絵ですが、アーティストの作品以上にものすごい力があり、伝わってくる表現だと思います。今私たちは、復興した広島の街を目にしていますが、被爆者の方が街を歩くときには、昔のこういった状況が見えているはずです。街がすっかりきれいになつても、人々の心の傷はいまだ癒えていません。

写真撮影・提供: 石田優子



《語り続ける思い》

本の中で紹介させていただいた方、北川建次さんは、当時10歳でした。小学校で被爆したとき、たくさんの友達が倒壊した校舎の下敷きになり、「助けて」と声が聞こえていましたが、火が迫り、ひとりで逃げたそうです。その後比治山に向かって避難していく途中、川沿いの鶴見橋のたもとにあるシダレヤナギのもとで休みました。その時、川に流れ、「助けて」と言いながら溺れていくたくさんの人たちを見ました。でも、どうすることもできなかった。助けてあげられなかつた友人のことを思うと、今でも非常につらいと語ってくださいました。

安楽寺には大イチョウがあります。前住職の登世岡浩治（トヨオカコウジ）さんは、弟さんが被爆して亡くなられたときのお話をしてくださいました。

《本作りからの出会い》

エディット・キーの日野唯史さんは、この本のイラストを描いてくれました。広島在住の方です。日野さんは被爆した電車のことも調べられて、大変詳しいですし、被爆建造物の中には被爆したトイレもあるということを見つけて、最近になってトイレも被爆建造物として登録されました。ユニークな視点をもって、広島のことを描いていらっしゃる方です。

『広島の木に会いにいく』は、児童書として小さい方にも読んでもらえるよう、優しい言葉を使って、振り仮名を振って書いています。そうしたところ、インターン生として広島に来ているアメリカ人のアナリス・ガイズパートさんという方も読んでくれました。日本語を勉強中の方にも読みやすかったそうです。彼女から英訳したいと言ってくれて、本の内容が部分的に英語ブログにアップされています。こんなふうに、海外の方にも広がりがあって非常に嬉しいなと思っています。

《被爆樹木に会いにいこう》

これまで取材を通して被爆者の方々とお会いし、貴重な話を聞かせてもらってきてましたが、皆さん高齢で、体力的な限界があると思いますが、本当に身を削る思いで証言をされているということを感じています。ご自分の一番つらかった体験を繰り返し話すわけですから、お話しすること自体、精神的に非常につらいことかと思います。それでも語り続ける。平和を大切にしたい、若い人たちに知ってもらいたいという思いで、人生をかけてお話をされていると感じています。私たちには見えないけれど、被爆者の方々には先ほどの絵にあったような大変な状況が見えている、その心の傷が今でも癒えていません。また、放射線の影響で健康被害もあり、今でも肉体的にもつらい思いをされています。そういうことを常に忘れずに、これからも証言を記録して皆さんに届ける活動ができたらと思っています。宝塚市のお子さんたちは、修学旅行で広島に行かれると聞いて、非常に羨ましいなと思います。私は修学旅行でそういう機会がありませんでしたが、若いうちは是

非、広島・長崎に行ってもらいたい、被爆樹木に会いに行っていただきたいと思います。木を訪ねながら街を歩き、何かを感じてもらわればと思います。

つたない話でしたが、終わりにしたいと思います。本当に、今日はありがとうございました。（拍手）



非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わざにはいられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝塚市

